

三心の研究

特に口称念仏と関連して

友松義勝

浄土教に於ける三心と云うものは、浄土往生の爲に起すべき三種の心を云うのである。これは善導、法然の兩祖に至つて口称念仏することによつて西方極樂へ往生出来る安心としての三心を説かれた。三心と云うのは

『觀無量壽經』の散善義に

若有衆生願生彼国者發三種心即便往生何等為三、一者至誠心、二者深心、三者廻向發願心、具三心者必生彼国復有三種衆生當得往生何等為三、一者慈心不殺具諸戒行、二者讀誦大乘方等經典、三者修行六念、廻向發願願生彼国具此功德一日乃至七日即得往生。

と説かれているのが、三心論の根本とみなされるのである。

元來、三心については觀無量壽經ばかりでなく、『維摩經』『起信論』等にも三心についても名称が明されている。

る。『維摩經』には、

宝積、当知直心是菩薩淨土、菩薩成仏時不謫衆生來生其国、深心是菩薩淨土、菩薩成仏時具足功德衆生來生其国、菩提心是菩薩淨土、菩薩成仏時大乘衆生來生其国。

と有り、この三心は菩薩心地の根底であり、即ち聖道菩提心としての三心である。又『起信論』には

復次信成就發心。發何等心略説有三種云何為三、一者直心正念真如法故。二者深心樂長一切諸善行故。

三者大悲心欲拔一切衆生苦故。

と有り、この三心は真如に対する心の持ち方であり、即ち聖道菩提心としての三心である。

次に觀無量壽經の三心を見ると、善導の説く三心は四者并定三心以為正因、一者至誠心者真誠者実欲明一切衆生身口意業所修解行必須真実心中作又真有二種一者自利真実二者利他真実。

二者深心言深心者即是深信文也亦有二種一者決定深信自身現是罪惡生死凡夫已來常流転無有出離文縁二者決定深信彼阿弥陀仏四十八願攝受衆生無慮乘彼願

力定得往生。

三者廻向発願心言廻向発願心者過去及以今生身口意業所修世出世根及隨喜他一切凡望身口意業所修世善根以此自他所修善根悉皆真深信心中廻向願生彼國故名廻向發願心。

と善導は説いている。

以上述べたように三心と云うのは望道門諸師が説いて後に善導、法然の両祖で確立したのである。次に中国浄土教に於ては曇鸞、道綽、善導、日本浄土教では法然等が三心を修して往生すると云うことをどのように理解しているかを説明する。曇鸞にては三不三信の説、作願及び廻向を往生の要とみとめられた。道綽にては曇鸞を継承して如来の総相、又は別相を觀縁憶念しつつ称名すると云うことである。三心は前述したように觀經にその源泉を持ち、善導によつて深い宗教體驗を基底として釈され法然は念仏者には必ずしもたねならぬと云う宗教意識である、この宗教意識こそ法然の三心觀は「法語消息」に示されている。しかしいづれの文にも善導釈が用いられているが、その解釈法は相異なる所でないといつても

過言ではない。ただ凡夫が浄土往生を願うには自己の罪惡生死の凡夫であることを自覺して同時に偉大なる仏の願力によつて仏の名を称えて心を真実心にして仏の願力に乗じて往生を得ることを確信して、三心を具足することであることが往生できる最大の条件であつたのであるこれによつて三心の重要性が強調されてくる。

選択集の研究

一 第三章を中心として

永田容靖

選択集は著述の少い法然上人にとつて、上人の思想研究の資料として最も確実な、又最も重要な述作である。

本集述作の動機については、末尾の句に今不圖蒙仰辭謝無地仍今慙集念仏要文刺述念仏要義とあ

つて、名前は記していないが、諸伝によると兼実公の依頼で出来たものと云う事が出来る。そして本集述作の原